

ただ曖昧に、

生きたりなんかして

翠月
瞳

登場人物

・私

・姉

Scene ⑨

一人用の部屋。

一人分の机。その上には、散らばった紙屑、ノート、ペン、ろうそく立て、使っていないような灰皿、マッチ。

一人分の椅子。少し傾いている。

一枚のレコード。ジョンとヨーコ。

一枚の壁掛けポスター。指を指すハムレット。

部屋からはみ出した、ピアノが一台。

ピアノの前には一人の女性。

ここは私の部屋。つまり、この本を読んでいるあなたの部屋。

私は詩を書くけれど、決して詩人ではない。

私はお芝居をするけれど、決して役者ではない。

私は歌を唄うけれど、決して歌手ではない。

何でもない、20歳。

ピアノの前に座っていた女性、机上のろうそくに火を灯しに行く。そして懐かしそうに、ピアノを弾き始める。

♪ 『トロイメライ』

私はドアから出、椅子に座る。

手紙の続きを書き始め、終える。

窓の外の明かりを見つめる。

「街明かりが、ゆらゆらと、音を立てて冬を形作る」

「そんな冬も、もう終わりそうです」

書き終えた手紙を読む。

「お元気ですか。私も、元気です。哀しくはないですか。寒さが沁みると、どうもそのように痛く感じますから。私はまだ、詩を作っています。誠心誠意、ひたむきに作っています。私、好きでした、あなたの歌」

「産まれて初めて聞いたのも、あなたの歌だった気がします。天使のような歌声で、赤子は泣き止み眠りについた」

♪『ブラームスの子守唄』（単音でゆっくり、寂しく）

「嫌な気持ちにさせてしまったら、ごめんなさい。でも一つだけ、私からも。あなたの歌は、世界を変えるのです。少なくとも、私の世界を。どうかお願い。もいちど、唄って聞かせてください。どんなに滅茶苦茶な、絡まった音でもいいんです。誰にも分からないような歌でも」

私は手紙に封をし、立ち上がる。

♪ 音楽消える

「私も、詩を書く理由なんてそんなもの、とうに忘れてしまいました。誰に届けようとか、誰に聞かせようとか、忘れてしまいました」

「忘れた方がいいんです。こういうのって。だって私たち、何のために生きているかなんて、そんなものもないのだから。ただ曖昧に、生きたりなんかして」

私はろうそくを持って手紙をピアノの上に置く。

そつとろうそくを吹き消す。

明かりが消える。

♪ 『ブラームスの子守唄』

Scene ①

私、一礼をして

「本日はお集まりいただきありがとうございます。混乱は未だ収まらぬ。私の野心も冷めやらぬ。若さと戦うことが『若さ』だなんて思ってもいませんでした。したいこととできることは通じ合わなくて、届けたいことと届けるべきこともそのように。前に進むのか、後ろに進むのかも分からない。世の中は、怯え

ることが多すぎる」

「皆さん、お元気ですか。最近いいことありましたか。私はね、ありました。好きな人と、デートに行っただんです」

私は椅子に座り、本（メニュー）を開く。

「何食べたい？」と聞くお相手に、私は黙り込んでしまいました。すると彼は、俺、カレー。と言いました。彼が『カレー』と言ったら、そんな気がしてきて、でも本当はそうじゃない。私はカレー一つにも懐疑的です。そもそもそいつは和食なのか洋食なのか。ライスとナン、どっちのつもりなんです？ スパイスカレーのこと言ってるなら厄介な相手だ。甘口ならマザコン。カツカレーは亭主関白……。今日のお腹の具合と気分では刺激が強すぎるし、もっと違うものが食べたい。でもそれが何かは分からない。だから、黙っておなじものを頼みました。カツカレー、ください……。亭主関白。頼んで、ちよっぴり後悔したら、すぐに忘れました。おいしいね！」

「私、本当は何を食べたかったんだろう？」

「彼は、私がしょんぼりしていることにも気がつかず、ずんずん前を歩いて行きました。彼とカレーを食べられた。それだけに手放しで喜べばいいのに、私は余計なことを考えすぎます」

私、立ち上がる。

「分からないことで頭がいっぱいになると、飽和量を超えたその塊は『言葉』になります。言葉は新鮮でも神聖でもありません。だって、ただの、この国の、言葉。迷信みたいなもんです、言葉って。でもそれしか使えるものがないから、ほら、便利だからスマートフォンを使うように、言葉、私の場合は日本語を使うんです。そんな風にして零れ落ちた文字の羅列は、この国だと『詩』と呼ばれます。Poem, Poetry, Poésie. そっちのが何だかカッコいいなあ。私の詩は、別に何でもありません。ただ形式としていうのなら、「詩」というはな「し」です。別に、私は詩人ではないし、文豪でもないし、はたまたポエマーでもない。何でも、ない、20歳^{にじじゅうさい}。それはよく、私を無限の可能性に導いてくれたり、非情な顔して崖の上から突き落としてくれたりします」

「何にもならないことって、それなのにどうしてしてしまうんです。お姉さんの好きな歌だってそう。どうして唄うかなんて、誰に答えられよう」

私はマグカップを手に取り、コーヒーを飲む。

「コーヒーは、飲む人がいる。だからコーヒーは、ここに在る。でもコーヒーそのものは、存在しようとして存在している訳でもないし、飲まれるよりも豆でいたときの方が気分がよかった

かもしれない。はたまた、こんな黒い肌に産まれなければと嘆いているかもしれないし、豆農家の惨状を自分のせいだと責めているかもしれない。今私の体に入った一滴は、果たして、生きがいを感じているだろうか」

私はレコードに針を刺す。

♪ノクターン第6番ト短調作品15の3

「私たちは絶えず、生きがいという壁にぶち当たる。（『ハムレット』のポスターを指さして） To be, or not to be, that is the question.（切り替えて）地球で、明日必ず誰か死ぬと決まっていたとして、その誰かに私が選ばれて、神様かなんかが最後に生きがいを問う。（ある、時の権力者のように手を挙げて）そんなもの、ありません」

♪音楽消える

と同時に私は死んだように倒れる。

すぐに起き上がる。

「まあそんなことは起きない訳だし、明日からもただ、生きていくのだけけど」

私は、椅子の上で足を抱えて小さく座る。

「とつとつ、生きてきた。生きがいなんて、見ないふりして。」

でもいつも、いつも、それがぴたーっとくつついて、どこも泳げない」

私は、意を決して水に飛び込む。

泳いでいるうちに星空が見えてくる。

♪ 『星めぐりの歌』 (歌)

私は歌の途中で溺れる。

「助けて、助けて！ 泳げないんだ！ 助けて！ カンパネルラ！ 助けてくれるカンパネルラは、もういないんだ。空に吸われてっちゃった。ねえ、あなたの神様って誰？ 神様を持たないこの国で、私どうやって救われたら（掬う）いい？」

ぶくぶく溺れる。

音楽が終わると、岸に辿り着いている。

「溺れたら、自分で岸まで泳がなきゃ。それが世の中、お決まり」

水から（自ら）上がる。

ぶるぶるぶる。

服を脱いでしぼる。

タオルで髪をふき、パジャマを着る。

「ふう。さっぱりした。生きがいにも明日を阻まれても、神様が
いなくても、私たち、毎日お風呂には入らなきゃならない。お
風呂が面倒くさいこと、いつになったら諦めがつくのかなっ」

私はコーヒーを飲む。

カップをまじまじ見つめ、

「……………またコーヒーの存在意義について考えています」

飲み干す。

「諦めることが、肝心。でもそんなの悲しすぎるよと若さがま
だ喚く。神様はいないとも、思えないのです」

私はおもむろにギターを手にし、弾き始める。

部屋のドアチャイムの音に合わせ、

♪ (Just Like) Standing Over (歌と演奏)

「音楽は、こうして私に届く。体を震わせ、今日の具合まで牛
耳って」

「(それぞれ、ピアノの短い演奏に合わせながら)でもクラシ
ックは優しくなくて、ジャズは気まぐれ、ヒップホップは墮落

を招く。(ピアノリスト、首を振る) ロックンロールは、言わずもがな……最近、何を聴いても辛く、満足しません」

私は、横になる。

寝付けない。

「神様って、何聴くのかな。ロックンロールもサマソニもないところにいるなんて……実は、R & B 聖歌とかオルタナティブお経とかあるのかな、ね」

「……ね！」

夜からは何も聞こえない。

「……みんな一人で『これ』に耐えているなんて、あんまりだ」

「夢は、ミンチのお肉みたいな泥。その中に入っていく心地です。終わりは見えない。恐ろしいことを、人間は毎晩平然とやる」

「おやすみなさい」

私はやっと、眠りにつく。

♪ 『ブラームスの子守唄』

Scene ②

「逃げて！」

私、飛び起きる。

「夢か」

大あくび。

♪ (ピアノで郵便が届く音)
手紙が届いている。

「お姉さんからだ」

『お元気ですか。私は元気です。今も詩は書いていますか？
それともお芝居？ それとも、歌を唄うようになっていたりし
て。何にしろ、あなたの将来が楽しみです。活躍を期待してい
ます。伝えたいことがあって、手紙を書きました。私の生きがい
についてのことです』

動きが止まる。

♪ 『My favorite things』

『長年、唄ってきました。歌が私のすべてでした。でも、私が思っていた歌の美しさ、崇高な輝きは、ひしゃげて、くすんで、今はもうその欠片もありません。私は、唄うことに絶望しました。ここで、唄うことに。私はいつかあの映画の主人公のように、原っぱの真ん中で、そしてまた愛する人たちと一緒に唄いたかった。そうはいかないようです。周りの人たちは、ここで歌えることをありがたく思えと煙たそうに言います。私が、間違っているのだと思います。率直に言います。私は、歌をやめてやりたいと思ってしまいました。誰かの夢を背負うことは、大人の責任かもしれませぬ。とても大事なことなのかもしれませぬ。それなら私は、まだまだ大人になり切れていないのです。よう。まだあの原っぱを、青空を、愛する誰かを、そして、たった一つの誠実な真実を、一番に手に入れたのですから。あなたの自由に自由に詩が書けたなら、もう少し楽に生きられたかもしれなぬ。我儘と言ひ訳を連ねただけの手紙になつてしまひ、ごめんなさい。まだ寒い日が続きますから、体に気をつけてね。では』

私は、愕然とする。

「お姉さんは、天使などではなかつた。だから傍にいたのもただの人間。卑しい人間。悲しい人間。悲しみを、しらんぷりする人間。神様、いるならあんまりだ！ お姉さんから歌を奪うなんて！」

「きつと今頃すっからかんで、一人ぼっちで、朝も昼も夜もわからなくなるくらいに、じつと空を見つめてるんだ。酷い」

ノートを開き、

「それなら私の『詩』も、このまま守っていく方がいい。見せびらかして、飛びつかれて、お金やお菓子やおもちゃをもらったりしても、嬉しくない。ううん、本当はちよつとばかり羨ましいのだけれど・・・でも、あのお姉さんでさえそんなことになったなんて、きつと世の中の方が間違ってるんだ！だめ、だめ。まやかしはとつてもおいしそうだけれど、だめ！お墓の前に置かれた果物ほど、哀しい気持ちになるもの、ないもん」

「でも、感傷がそのままじゃ腹を満たさないことも、事実です。この先も、一人で詩を書いて、書き続けているのかと考えると気が滅入ります。20歳^{にじゅう} そこそこで生きがいを見つけたなどそもそも早合点です。ごろごろして一日の大半を過ごしているのに、ごによごに言い過ぎです。『普通』に、したらいいんだと思います。悩むのは好きな人のことだけにしておいて、やれやきもちだ、やれあげもちだ、なんて言って！」

「でも太陽が顔を覗かせる度、月が照らされ青白く光る度、果たしてそんなことに悩む必要はあるのかと、わざとらしい乙女

心は葬られてしまう」

私、机の上に散らばった紙屑を捨てる。

「あーあ、神よ、どうして私をこんなに小難しくおつくりなされた？ ウェディングドレスも白無垢も着たいのだけれど、そんな簡単に片付かないのね。私の嫁入りは」

「はあ。怒ったらお腹すいた」

とんでもないところから食事を用意し、

「いただきます」

手紙を読みながら、食べる。

♪『ブラームスの子守唄』

Scene ③

もう一枚の手紙。姉の声だけが聞えている。

『お元気ですか。私は元気です。先日のお手紙で、生きがいについて書きましたね。難しく、悲しい気持ちにさせてしまったかしら。私は今、目一杯、歌っています。思うところはあるけ

れど。望む場所は、きっと確かに在ると信じてこの道を歩いていくほかないのです。特にあなたは、若いのだから。生きるも死ぬも考えず、ただひたむきに、やってごらんさい。生きている限り、やってごらんさい。お返事を急いでいるわけじゃありません。ただ、あなたが元気で生きているか、心配なので。久しぶりに、あなたの言葉が聞きたい』

Scene ④

部屋が明るくなると、私は心通の手紙をぼうつと眺めている。

「何日経っても、お返事は書けそうにありませんでした。そしてそれと共に、私は詩が書けなくなってしまいました。スランプです。別にべ切があるんじゃないし、いいんだけど。体に溜まっていく。言葉になれないと、それは段々、（胸に手を当て）このあたりの隅っこから蝕んでいく。胸に水が溜まるみたく痛む。とても恐ろしい感じがする。いやに苦しい」

ノートのページをめくる。

「昔書いた詩を読み返すと、ぞっとしてどこかへ帰りたくなる。でも、そんな私を受け止める胸はない。小さな頃は、お姉さんの作ったメロデーに、でたらめに音を乗せて躍ったようなきがする。それが私の『歌』だった。それを聞くとお姉さんは微

笑んで、音符と共に透明になっていった」

姉との記憶に引っかかる。

「透明に……」

違和感を感じつつも、外に出る準備。

ポンポンのついた帽子をかぶる。

ノートとペンを持つ。

「いってきます」

ドアを開け外に出、ぐるぐると歩き回る。

宇宙そらを見ているとこの凍りそうな海でも悠々と泳げそうなんだ

僕は一端のクジラ

けれどひとたび街灯に目をやれば

僕は一介のイワシ

吐く息の密度が白く濃い

電柱が屈折して見える今晚

皆、何故春を愛し求めるのだろうか？

僕の心は知っている

輝く星たちもどこかそれを知っているように冷たい
星が 人間の作った通りの五角を成すように見える時は
疲れている

すなわちこの世は疲れている
くたびれた成人たちは
煙草の匂いをぽとぽと落とす
ただ一人だけ 祈りながら唄っている
星を初めて目にしたように

電車なんかは 僕をまたくたびれさせる
どうやったらここから逃げられるかを
必死で考えていると

駅に到着する

漂流していく身体からだの一部のことは忘れて

慌てて他の人たちに続く

帰ろう、みんな、家へ帰ろう

♪ 『home sweet home』

宇宙に「そら」とルビを振った人と友達になりたい
そらは「空」なんて一文字じゃない
ずっと沢山のものが詰まっている

歌声が 僕の元を去ってから

宇宙が空からに見えるようになった

僕の中身はそれに反して詰まっていた
目一杯の問答を続けて
はち切れそうな身体
ちぎれないように
息を吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸って

♪ 『home sweet home』 (歌)

段々と 自分の身体からだのことを忘れてゆく
目と鼻と口と耳の感覚だけが残って
そのうち 目だけになる
じっと見つめていると
何かを思い出しそうになる
神様も教えてくれないしなくても大事なこと
自分の手のひらをまじまじ見つめて
皺に刻まれた命の証をまじまじ見つめて

"Come back my sweet home."

おかえりなさい

私は家に着き、帽子をぬぐ。

「ただいま。今日も、曖昧に一日が過ぎていった。私の思いは言葉にならずに、白みがかかった空に沈んでいった。いつまでも、どこまでも、届くことはないのです。この部屋の、ホコリが溜まる角っこも知らんぷりです」

「生きがいも、神様も、どうしても良くなる日が来るのでしょ
か。夢を怖がらず、音楽にこだわらず、どうして生きているの
か、どうして生きてきたのかがはっきりと分かり、明日、どう
して生きていくのかが託されている。そんな今日が来るのでし
ょうか」

「そんなこと、神様にしか分からないか」

ノートを閉じる。ノートは、いつかのこの台本のこと。

Scene ⑤

「と、まあそれがここまでのお話、詩、ポエムです。曖昧な一
人言にお付き合いいただきありがとうございます。私に、姉
なんていません。姉は、私が産みだした幻で、よくこんな詩に
登場してもらったり、一人遊びのなか夢想をする
と・・・・・・・・」

地震。

私に、いくつもの光景がよみがえる。

「逃げて！」

写真がバラバラと落ちる。

棚が崩れる。

ガラスの置物が粉々になる。

電球がおちる。

地面に亀裂が走る。

海がとどろく。

地鳴りが落ち着く。

その内の一枚を見つめ、

「誰……」

「お姉さん？」

♪（応答するような音）

ピアノの方を向いて、

「そうだ、私には、姉がいました」

♪（さらに一音加えて）

「お腹にいたころ、そのちよつと前から、誰かいた気がしたんです」

♪（さらにもう一音）

地震の唸りが、遠くから聞こえる。

私は耳をふさごうとする。

これまでの歴史から。自分の生きてきた歴史から。

「逃げて、逃げて、と誰かが叫んでいた。私をくるむ温かい水が揺れていた。それが止まったときには、私の部屋の壁に、たくさんの人の涙がへばりついた」

「お腹から出ると、お母さんが泣いていた。私と、もう一人の誰かを見ているような、そんな眼差しで」

「どうして今まで忘れてたんだろう。こんなに大事なこと」

♪ 『ambiguous lucidity』

「神様からの知らせではなく、たった一枚の写真が、私に気がつかせた。私は天才なんかじゃないし、信仰深い修道女でも、尼さんでもない。『神様』なんてそんなものに、言葉ばかりで頼るな。お姉さんの命が、私に息づいているように。私が、言葉を紡ぐように。目の前にあるのは、時が刻んだ出来事だけ。私は、もっと思い出さなくちゃ。もっと私を知らなくちゃ。私になる遙か昔のことまでも、胸に留め置き生きなきゃならない。コーヒー豆みたいに肌が黒くて泣いていたこと、自分自身の正義だけで沢山の人を殺したこと、シェイクスピアの四大悲劇、銀河鉄道の夜何が起きたか。ジョンとヨーコその他大勢の愛の物語、産まれた私たちは憎むことばかり。数字にばかり祈りを

込めて、忘れてしまった地の怒り。この夏エアコンをつけ過ぎて未来の暑さに貢献したことや、冬、こたつにくるまって何も産みだせなかったこと。マスク越し、声にならなかった言葉たち。全部、全部、ここに刻まれている」

「生きがいか、私の中のちっぽけなもので立ち止まっている場合じゃない。地球は回って、私は今ここに生きて、私からしか湧き上がらない喜びや、悲しみやなんかを当てもなく放って。どこにも辿り着かないけれど、それはきつといつかこの世界の、ううん、もっとうんと遠くのどこかかも。誰かが、私の言葉にそっと触れるかもしれない。神様の言葉を待つんじゃない。私……書いてみよう。まずは今日のこと。どんなに滅茶苦茶な、絡まった言葉でもいい。言葉にならない言葉も、いつかは芽吹く。夢は、そのときに見たらいい」

私は、紙とペンを用意する。

「今は、それでいい。ただ曖昧に。私たちはただ曖昧に、生きたりなんかするのだ」

ろうそくに火を灯す。姉が手を添えている。

暗転

終